

2021 年度 卒業生アンケート結果 報告書 (案) Ver.3

1. 総括

2021 年 10 月のホームカミングデイは COVID-19 流行のため zoom での遠隔開催となった。そのため昨年度に引き続き、今年度も卒業生アンケートを web 上のアンケートで実施した。実施対象は、学科卒業生の 591 名で、回収人数は 46 名、回収率は 7.7 % と低かった。同窓会配布物の多くが卒業生の手元に届いていない現状もあり、アンケート回収数は多くはないものの、1~26 期生までの多様な卒業生の回答を集めることで幅広く卒業生からの評価をもらったことは、今後の看護学科の教育を考えるうえで重要な示唆を考える結果であると考えられる。

卒業生の回答では、看護学科で受けた教育プログラム DP1~8 のうち、就職先で生かされていると思う割合が DP1~6 については 80-90 % だった。DP7「メンバーシップ・リーダーシップ」は他の項目と比較するとやや割合が低く 70% 強、DP8「国際的視野」は 30% にとどまった。例年、教育プログラム内容に関する評価の低かった DP4「地域医療連携能力」は 80.4% で、地域包括ケアシステムとしての病院機能に基づく看護展開が広がっていることがうかがえる。また、最近 5 年間の卒業生 20 名からの回答では、では肯定的評価が DP1「主体的学習能力」では 85%、DP2「課題解決能力」、DP4、DP6「教養に裏付けられた品格」、DP7 では 90%、DP3「パートナーシップ」では 95%、DP5「倫理的態度」では 100% だった。DP8 では 40% だったが、近年の教育改革が看護学科教育内容に対する高評価へつながっている可能性が示唆された。

2. 概要

2021 年 8 月、看護学科卒業生を対象に、第 5 回ホームカミングデイ広報誌を郵送する際、QR コードを記したアンケート依頼書を同封し、Google Form を用いた無記名 web 上アンケートへ 2021 年 10 月 31 日までに回答した 46 名の回答を分析した。内訳は以下の通りである。

配布人数 591 名 回答 46 名 (回答率 7.7%)

卒業期生の内訳

1 期生-2 名、2 期生-2 名、4 期生-2 名、5 期生-1 名、6 期生-1 名、7 期生-1 名、8 期生-3 名、9 期生-2 名、11 期生-1 名、12 期生-1 名、15 期生 4 名、16 期生-1 名、19 期生-3 名、20 期生-2 名、21 期生-1 名、23 期生-2 名、24 期生-3 名、25 期生 6 名、26 期生 8 名

看護職として働いた年数の内訳

1 年未満-8 名、2 年-3 名、3 年-3 名、6 年-3 名、7 年-2 名、8 年-2 名、9 年-1 名、10 年-2 名、11 年-2 名、12 年-2 名、13 年-1 名、14 年-2 名、15 年-1 名、17 年-1 名、18 年-1 名、19 年-2 名、20 年 1 名、23 年-1 名

現在の職種の内訳

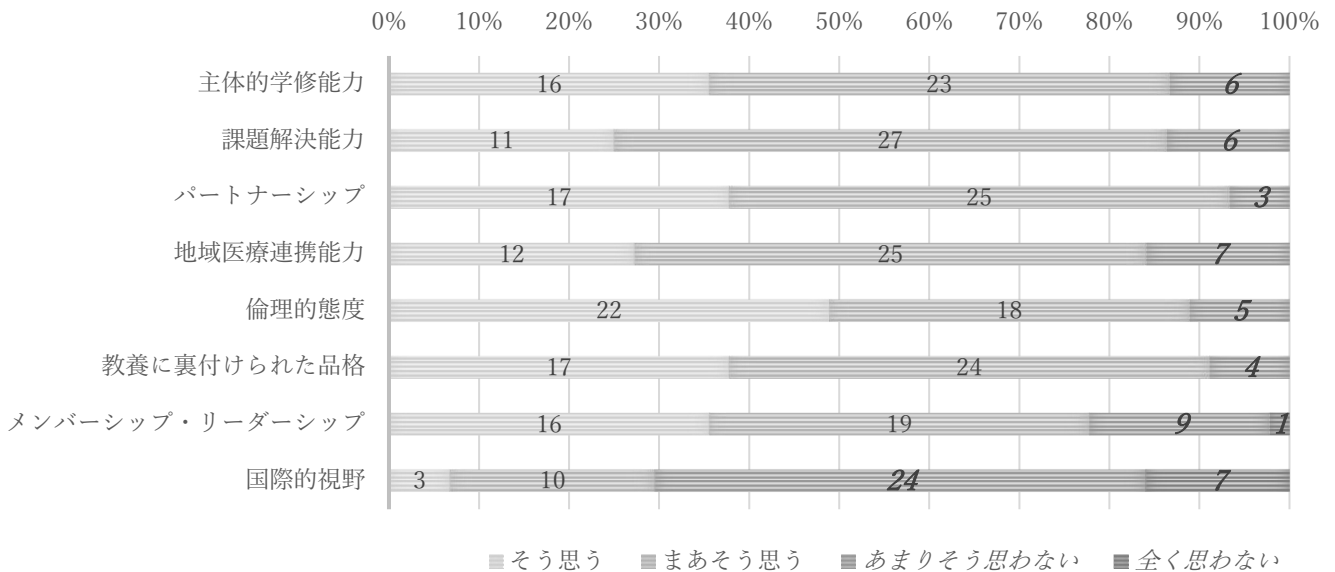
看護師 29 名、助産師 2 名、保健師 8 名、看護教員 2 名、大学院生 1 名、その他 2 名、無職 2 名

卒業後の進学もしくは進学希望者数

進学希望あり 8 名、進学希望無し 18 名、進学した 9 名

1. 結果

1) 看護学科で学んだ教育プログラムを、就職先で生かすことができましたか



自由記述

DP1 主体的学修能力

【そう思う】【まあそう思う】

- ・ 常に本質を多様に考えることを学べたので、企業などのイノベートしていかなければならない環境では役に立ったから
- ・ 医師や上司の指示待ちではなく自分で考えることが出来た為
- ・ 学生時に学んだことをベースにして、病棟勤務で、必要な学びを継続することができたため
- ・ 自分のやりたいことを諦めない姿勢は今も継続してあるので
- ・ グループワークが多かったため
- ・ 分からないことは積極的に調べ、書籍を購入し自己研鑽しているから
- ・ 実習では自ら学習へ取り組む姿勢が問われたため
- ・ ケアをする前に根拠を調べ実践できる習慣がついたと思う
- ・ 普段の試験から実習、国試の勉強まで、補習など先生方から、勉強を促される形でなく、自分たちでやっていくスタンスが自主性を高めていたと感じる
- ・ 内気だったが、大学での勉強を経て自分から質問や発言し学んでいくことが出来るようになった
- ・ 普段の課題や実習で求められた、わからないことをわかるまで解決しようと努力する習慣があることで、自分の知識・技術を高めることにつながっているから
- ・ 看護師1年目と、まだ、知識も技術も未熟であり、自分から分からなかったことや疑問に思ったことをすぐに調べ実践に活かすことの大切さを実感し、大学で身につけた主体的学修能力が今でも大事であると思うから
- ・ 自分自身で学習を進めていく力は備わったから

【あまりそう思わない】

- ・ そのことについて学んだ記憶はありませんが、大学のときに着いた、分からないことを調べ、根拠を持って看護をすることについてとても役立ちました

DP2 課題解決能力

【そう思う】【まあそう思う】

- ・ 単独でその場でレスポンスしていかなければならない環境では、瞬発力と日々の継続力という課題解決能力が必要で、その基礎的な姿勢を学べたから
- ・ 困難な事例や状況にも取り組むことができた為
- ・ 看護研究など、今も積極的に実施しようとしている
- ・ 看護研究で学んだ統計の知識は、看護師として学会発表の際などに、役立った。しかし、臨床における、課題解決能力は、大学よりも、臨床の場で身につけていった部分が大きい
- ・ 臨地実習で患者を受け持たせてもらい、患者の事を知り、必要な看護について助言をもらいながら、立案、実践、評価できたことは就職後にも役立っていると思う
- ・ 特に研究などは行っていないが、業務には活かしているから
- ・ 実習、研究で学んだことを職場での看護研究に少し活かすことができました
- ・ 教員との距離が近かった
- ・ 順序だてて考えることができるようになったと思う
- ・ 勤務の中で業務をこなすだけでなく、これまで身につけた知識や新たに得た知識をふまえてどう実践に活かすかを考えられるようになったため

【あまりそう思わない】

- ・ 看護研究をする前に退職したため

DP3 パートナーシップ

【そう思う】【まあそう思う】

- ・ やや過剰とも言える「患者さんのために」の思考パターンの元に、過度に自己犠牲する経験をすることは、自分なりのバランス感覚を得るために必要なプロセスだと思うから
- ・ コメディカルと協力して働くことが出来ていた為
- ・ やはり患者様とどんな話をしたら良いのか、学生の頃は患者元に行くのも緊張する状態だったが、実習を重ねることで、就職した時には自然と患者とのコミュニケーション取ることができていたと思う
- ・ ふとした時には思い出し、パートナーシップで臨む気持ちになれるから
- ・ PNS で働いているのですが、導入に違和感がなかったので役立っていると思います
- ・ 他職種との連携や同僚とのコミュニケーションをうまくとれるようになった
- ・ 患者さんとの関係は良好だったと思うから
- ・ 患者さんやその家族との信頼関係を築くためにパートナーシップを意識して対象者に関わる事ができているように思うから
- ・ 人を思いやる力、傾聴共感していくことの重要性は学べた

【あまりそう思わない】

- ・ 臨床の場で多くを学んだ

DP4 地域医療連携能力

【そう思う】【まあそう思う】

- ・ 私自身のキャリア上ほぼ関わらない領域のため、大まかな知識として活かす程度なので
- ・ 周りのマンパワーを借りて課題の解決に取り組んでいた為
- ・ 基本的な知識は大学で学んだ。それを実践する能力は、臨床の場で学んだ
- ・ 地域で生活をするために、様々な職種やサービスがあることを知り、それらをうまく利用することが大切。その情報収集能力を高めるためには常にアンテナをはりつつ、コミュニケーション能力も重要
- ・ 学生時代の他職種のシャドー実習は実際看護師になった後には直接的に見ることがない場面や話しを聞くことができ、他職種業務や役割理解に繋がったと思う
- ・ 実際に携わる業務をし、重要性を感じたから
- ・ その実際を知ることでイメージしやすくなった
- ・ 在宅看護学にて学んだ地域のサポート体制の知識を把握できていることで、帰宅する患者の今後について想像し、必要なサポートに関する知識を提供できることにつながっているから
- ・ 1年目であり患者さんなどに直接情報提供などをするまでには至らないが、退院後の生活などを見据えて活用できる社会資源などを考える必要性を認識して業務をしていると思うから
- ・ 地域包括ケア病棟で働いていますが、在宅や精神、老年や地域の授業で学んだことを断片的ですが思い出すことがあります
- ・ 各医療職との連携の重要性はわかったが、実際は自分の知識不足などもあり、医師などと対等に話を進めるのは難しかった

【あまりそう思わない】【そう思わない】

- ・ 医師、薬剤師、理学療法士とは連携したが特にその他職業とは深く関わる機会がなかったため

DP5 倫理的態度

【そう思う】【まあそう思う】

- ・ 概ね対象の事を第一に考えて行動出来ていた為
- ・ 実習指導の方にお世話になりました
- ・ 医学科と合同で行った倫理演習が役に立った
- ・ 医師からの病状説明などIC後の受けとめを確認することもあり、患者さんなりの考えや価値観に触れる機会が多く、その際に自身の倫理的姿勢が重要になると実感しているから
- ・ 価値観や権利を尊重することの重要性は分かり実際に尊重できる場面もあるが、医療者に対する暴力暴言など学生時代には遭遇しなかった患者とのやり取りの難しさに困る場面も多かった

【あまりそう思わない】【そう思わない】

- ・ 学生時期は医療を学ぶのに必死で、相手の価値観を理解するレベルには至っていなかった（理解した上での尊重ではなく、形式的な尊重、態度、姿勢にとどまっていたと思う）ので
- ・ 自身は、学生のころに、そこまで意識して学んでいなかった
- ・ 就職してからさまざまな事例に出会い身に付いてきたと思う

DP6 教養に裏付けられた品格

【そう思う】【まあそう思う】

- ・ 周りとの良好な人間関係を築けていた為
- ・ 実習や、先生方との関係の中で、学ぶことが出来た
- ・ 一年生の頃の概論が結びついてると思います
- ・ 社会人としてのマナーやその場の状況に合った振る舞いを意識できていると思うから
- ・ 礼儀や周りを見る力は誰よりもあると感じた

【あまりそう思わない】【そう思わない】

- ・ 卒業前後で変わらない
- ・ 浅い理解（形として得る）レベルだったと思うので、学んだ記憶もないから。ただ、そのような品格を強要された記憶もないので、その後、自分のペースで学んでこれたと思う

DP7 メンバーシップ・リーダーシップ

【そう思う】【まあそう思う】

- ・ 学生生活全般で、学生なりのリーダーシップを発揮する機会があったから
- ・ どの職場でも周囲の人と良好なコミュニケーションが取れていた為
- ・ 看護管理の実習で、実際に現場の管理職から話を聞き、仕事を見学したことは印象に残っている
- ・ 病棟で働く上で、メンバーシップは非常に大切であり、報告、連絡、相談や先輩などに声をかけるタイミングなどは就職しても生かされたと思う
- ・ グループワークで培ったと思う
- ・ リーダーを始めた頃に退職したためリーダーシップという意味ではそこまでいかせていない
- ・ 1年目で未熟な為、はじめはチームにはあまり貢献できないのではないかと考えていた。しかし、自分にできることは責任をもって遂行するようにしたり、患者さんから得た情報はチームのリーダーさんなどに報告したりすることで、メンバーシップを発揮することを意識しているため
- ・ チームで協同することの重要性は現場に出ても身にしみるように感じたが、自分より経験を積んだ先輩の中で、自分の思いや意見を発していく難しさを感じた

【あまりそう思わない】【そう思わない】

- ・ 自身はそこまで、学生時、深く学んでいなかった。臨床の場で多くを学んだ
- ・ 学んだ記憶がありません
- ・ 就職後に身についた

DP8 国際的視野

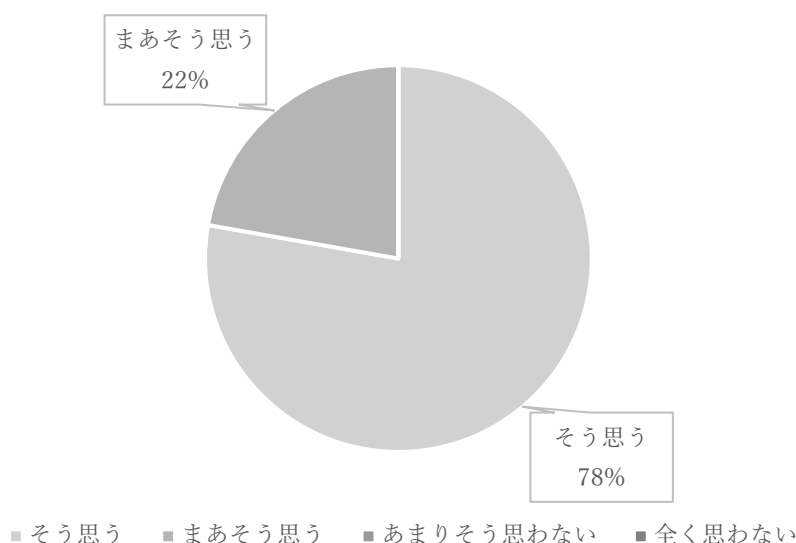
【そう思う】【まあそう思う】

- ・ 当時も今も、看護に限らず興味実践は続いているので、元々の性質が減退するようなことはなかったのだと思う
- ・ アフリカでの2年間のボランティア活動には大学時代の課外活動が役立ったと思う為
- ・ アメリカ研修で学んだことや、違う言語の患者さんに対して抵抗なく接することができる
- ・ 機会がなかった

【あまりそう思わない】【そう思わない】

- ・ 医療機関で使える英語が見につかなかった
- ・ 卒業時には国際看護などの授業はなかった
- ・ 外国の方とのコミュニケーションには苦戦することが多く、看護の場面で活用できるような英語を学生時代学べたら良かったと感じる
- ・ 国際看護についてはあまり学校で学べなかった
- ・ 英語を使う機会がなかった。通訳者がいた
- ・ 現段階では国際的視野についてあまり実践として活かせていないと感じるため

2) 看護学科で学んで良かったですか



自由記述

【そう思う】【まあそう思う】

- ・ 今振り返ると課題なども多く大変だと感じることも多かったが、講義や実習での学びが1年目でも実践として活かせていると感じる機会も多いため
- ・ 他病院に就職して、慈恵の他人を思いやる傾聴共感の精神は人間として最も重要なことで、その重要性を一番に学べたことはとても良かったと思う
- ・ 少人数できめ細かい教育がされていた
- ・ 少人数制だったので、実習中も先生が細かく見てくれた
- ・ アットホームな雰囲気の中、少人数で学び、実習など苦楽を共にした同級生の活躍は刺激になります
- ・ 少人数でアットホームな環境で、4年次の選択科目では自分のやりたい事が十分に出来た。ホスピスの見学や退院後患者様の訪問等、自分の興味を追求することの楽しさややりがいを知ることが出来き、看護職としての大事な基盤を学ぶ事が出来たと思う
- ・ 特に系列の大学病院での実習を行ったことで、就職時に見慣れた物品・雰囲気・システム下で勤務できているので、働きやすかった

- ・ 医学看護の基本的な知識をしっかりと、基礎を学ぶ期間であったため、同業のよい仲間と出会い、切磋琢磨する環境であったため
 - ・ 当時の最先端の情報を教えてもらいながら、自由に自分の意見を言える環境でのびのびと共に学べたので、その後も自分で創造していきやすい土台をつくってもらったと思う
 - ・ 先生との出会い。今小児看護でやっていくなかで、先生方との出会いは、人生のなかで大きな意味があるとおもっています
 - ・ 先生たちが親身になって教えてくれた、良い距離感だった、設備が綺麗、大学病院が近くて現場の声が聞けた
 - ・ 先生方が良い人ばかりだったから
 - ・ 私のように座学も実習も得意でないタイプの生徒が、ヘルプを求められるような存在の場所や人があれば良かったと今振り返って思います
 - ・ 保健師の勉強もしたことで、病院での看護は退院後の自宅での生活も含めて考えながら、看護するため、役に立ったと思う
 - ・ 研究については臨床でも役立ちました。また看護の精神などについても大切なものを教わったと思います
 - ・ 同じ目標に向かって切磋琢磨できたのはよかった。単科大学なので、総合大学と違い他学科の人との関わりがなく、幅広い視野を得るのは難しかった
 - ・ 看護に限らず、根柢を持って生活することができる習慣がついた (21 期生)
- 3) 看護学科で受けた教育の中で、これからも継続すべきことがあればお聞かせください。
- ・ 看護師として勤務して、自分から主体的な姿勢を見せていかないと看護能力は高められないことを実感したので、実習において学生が主体的に看護師とコミュニケーションを取り看護力をつけていく姿勢は継続してもらいたいです。
 - ・ 実際に働いてみて、患者さんの出ている症状が何によるものかその都度アセスメントして、ケアに活かしくというプロセスの大切さに気づいたので、1年からのフィジカルアセスメント、症状マネジメント、2.3年の看護過程などこれまでのような授業を継続してほしいです
 - ・ 実際に就職をしてみると理想とは異なる場面が多く、大学時代は看護の魅力的な面を多く見させてもらっていたのだと思う。人を尊重する精神や看護理論から現場は離れてしまっていることもあると感じるが、だからこそ看護の根本をしっかりと学んでおいてよかったと思う。4年次のシミュレーション演習は患者の病態を系統的に考えていく思考の基礎になっているのでコロナ禍が終わっても続けて欲しい
 - ・ 看護実習のアセスメント、看護師からのフィードバック
 - ・ ICU や救急部の実習は、学生の時イメージがつきにくい場所だと思うので、続けて欲しい
 - ・ 倫理演習、倫理的配慮について
 - ・ 人間という答えのない対象に向き合い続けるために、フリーディスカッションでの安心・成功体験は必須と思います。学校、教室はそういう場であってほしいと願います
 - ・ 今の状況があまり分かりませんが、学生が、自己で企画して学ぶ事は続けてほしいと思います
 - ・ 一般教養。少人数制により、友人や先生方との距離が近く、よい関係性であったこと

- ・ 教員との距離が近いのはこれからも続けてほしいです
 - ・ 他校に比べて少人数であることが、アットホーム感もあって学びやすい環境だった
 - ・ 先生方の優しさ
- 4) 看護学科の教育で、改善すべきと思うところがあればお聞かせください。
- ・ 学内演習では看護の実際に近づけて行くこと就職後にもその経験を自分の技術としてきちんと使いこなせるようになるようにすること(例えば頻繁に使う看護技術は特に演習を行うなど)
 - ・ 実際に患者さんと関わる場面を想定した演習の機会がこれまで以上にあるとより良い
 - ・ 大学では、疾患別看護は積極的に行なっている印象でありましたが、症状別看護は少なかった印象なので、症状別看護にも力を入れていくといいと思います。臨機応変に対応できる力が身につくと思います
 - ・ 今は、システム化が進んでいるため、その技術や活用法、働き型改革など、法整備の知識は必要
 - ・ 救急手当の演習・実習があると就職後に役立つと思いました(養護教諭)
 - ・ 英語の授業の中で、就職して患者様とのやりとりなど想定した、医療的要素の深い内容を行うと興味や学習意欲が増すと思うし、就職後にも生きると思う
 - ・ 医療英語はもう少し実践的に学びたかった
 - ・ 看護ではなく、看護職に関する学びがもっと多様になると良いと思います。社会的立ち位置、ジェンダー、専門職としてのキャリア等など、具体からその背景まで包括的に学べると自ら発展させていける可能性を感じられると思います
 - ・ 選択肢が病院か保健所しか浮かばなかったので、就職活動など、将来の設計図をもう少し描いてみたかった。
 - ・ 課題の多さ、看護過程の多重課題

3. 点検・評価と改善点

以上より、本内容について点検・評価について利点を実線、欠点を点線、改善点についての対策を二重線で示した。

一昨年度から行った卒業生アンケートであるが、今年も昨年度と同様、コロナ禍のため、web 上での実施となったため、バイアスの少ない、忌憚のない意見を収集できたと考える。引き続き回収率が低いことは web 実施のデメリットであり、今後は回収率を上げる工夫が必要であると考えられる。ただし、時間が経過した卒業期生の回答者数は昨年度と同数の傾向もあり、回答者が固定化している可能性がある。そのため、次年度以降は、同窓会を通じた発送物だけに頼らず、より多くの卒業生にアンケートへの協力が得られる方略を検討する必要がある。まずは本年度より開始となるキャリアサポートステーションを通じて、メールでの卒業生アンケート依頼が可能になるので、次年度はその経路で発信する。くわえて、卒業年度が浅い期生は、インターネットを介した SNS 経由の繋がりも強いため、卒後3年目ぐらいまではノンオフィシャルな同期生のコミュニティーを通じてアンケート回答について情報共有できるよう声掛けするなどの対応を取っていく。

今回の結果では、看護学科で卒業時に求める 8 項目の DP に対し、高い評価を得られた。特に DP3「パートナーシップ」、DP6「教養に裏付けられた品格を備えた態度」について 90%以上の卒業生が

本学で受けた教育プログラムを就職先で生かしている、と回答していた。これについては各 DP に基づく教育プログラムが学生へ浸透し、その教育的効果が得られていると考えられる。自由記述でも、本学の理念や使命に基づく教育内容と方法について評価され、学びを現職で還元できるよう努めていた。看護過程、看護研究の教育効果を挙げる卒業生も一定数おり、講義・演習や課題の中でパートナーシップ学習を含むグループワークなどの体制に基づく、課題解決能力向上に関わる教育の効果もあったと考えられた。臨地での職務上、重複課題への適切で迅速な対応が求められる中、看護学科の教育プログラムの中で、主体的な問題・課題解決のための行動の素地を作るきっかけとなったと実感していた卒業生もいたが、一部では多重・過重課題に対する改善を望む声もあった。これは、課題へ取り組む負担感などは個人の要因も影響していると考えられる。そのために、DP に基づき「資質の高い看護実践者の育成」を目指し 8 つの能力を標榜して段階的に構築された教育プログラムであったと、卒業後に評価できるよう、在学中から主体的に理解し行動できるように新年度オリエンテーションや、学年間交流を機会として、看護総合演習や看護過程などのように学年ごとでより看護専門職者としての素養や実践能力を高めるために必要な目的目標や学習課題について、学生通しが様々な立場に立ち討議できる場を戦略的に設けることも取り入れていく。

昨年、教育プログラムとして評価されていなかった地域医療連携能力と国際的視野については、本年度、地域連携能力は他の DP と同様に 8 割を超える評価となった。在宅看護学や地域看護学といった、地域包括ケアシステムとの協働が不可欠な科目の中で学んだことが、臨地で専門職となって機能する際に、基盤を学び臨床でその実践能力を高めている実感となって振り返ることができているのではないかと推測される。地域医療連携能力については、本学では他校に先駆けて在宅看護学の教育も行っており、近年の地域包括ケアシステムの構築の浸透、第三病院や葛飾医療センター等、地域連携機能病院としての機能を最大限に発揮している附属病院での実習など、学ぶ機会も多かったことが要因として考えられる。国際的視野については、今回の回答者に本学が近年重視している国際看護に関連する教育プログラムを受けていない卒業生が多かった。加えて、DP の設定と、それに対応した教育を行う前のカリキュラムを受けた卒業生からの回答も多く、現在の教育内容とはやや異なる可能性がある。また、近年の感染症流行に伴う国際社会との交流手法の変化、地域や在宅における医療提供体制の変化など、これまでも社会の要請に応じてカリキュラムが変遷している。国際的視野の実践教育という点では、現在行っているアメリカ研修に加え、イギリス セントトーマス病院での実習は 2017 年（23 期生）から、シンガポール国立大学での研修は 2019 年（27 期生）から始まり、国立台湾大学での国際交流も今後始まる環境は整っている（いずれもコロナ禍で 2020-2021 年度は見合わせる事となった）。今後 2-3 年間の卒業生においては、コロナ禍で学習機会に制約があった現状もあり、引き続き卒業生からの評価内容を注視する。つまり、時代背景に応じて現在、カリキュラム変更に対する要請も多様化しており、本学の強みを生かした DP 達成への教育体制の構築もなされている経過にあり、今後も引き続き、卒業生評価を累計し、在校生による授業評価や、雇用者アンケート結果とも内容を照合しながら、多面的に教育効果を評価し、今後の改善への示唆を得る必要がある。

以上より、本年度の卒業生アンケート結果より、本学の教育理念である「人間の尊厳に基づいた心豊かな人間性を形成し、専門的・社会的要請に応じられる看護の基礎的能力を養い、看護学の発展に貢献できる創造性豊かな資質の高い看護実践者を育成すること」に関しては、卒業生が本学教育プログラムを修了して概ね評価できる内容であったことが評価できた。卒業時期によっては現段階の DP

に沿った科目は行われてはいなかったが、慈恵医大看護学科で大切に踏襲してきた看護学科の教育理念によって科目は展開されており、教育の核の部分は変化していないことも評価できる点である。また、主観的なものであるが、アンケートに回答してくれた卒業生全員（100%）が慈恵看護学科で学んでよかったと感じており、各 DP 教育は慈恵で学んだ学生として涵養され、卒業後にも就職先で生かされているのではないかと推察できた。

看護学科教育に望む改善点としては、多様化する現代に通用する看護学教育（ICT や一般教養の重要性を含む）、看護実践能力の基盤となる看護学の習得と、それに並行して患者による語りやシミュレーション教育などさらに臨地に則した臨場感ある実践教育の必要性など、将来のキャリア構築における選択肢を想像できる学習基盤を求めていることもわかった。本年度より開始された臨床教員制度の導入をふくめ、VR 機器を用いたシミュレーション教育など、附属病院と協働した時代の要請に応じた看護実践能力の育成を目指した教育体制の構築が、現在、時代のニーズに連動し進行されている状況にある。本学教育プログラムを修了し看護実践家として活躍する卒業生にとっては、近年の卒業生のレディネスを知ることや、加えて、臨地現場でのニーズとの教育連動性を知り継続的なキャリア研鑽の機会ともなるため、看護学科ホームページや受験生応援サイトには、看護学科の最新動向や教育プログラムの現状などの情報発信が含まれていることを伝えていく。

今後は、本アンケートと雇用者アンケート、カリキュラム評価アンケートや教員評価、在学生の e ポートフォリオによる評価を統合して更に具体的で実現可能な教育改善方略を明確にする。

看護学科 IR 委員会